

風雲録

雑誌名	龍南會雑誌
巻	7 3
ページ	1 1 6 - 1 2 2
発行年	1899-06-27
URL	http://hdl.handle.net/2298/5362

風雲錄

○高潔乎蠻風乎 (穗村)

ドラマガードを責むる者は曰く精神を錯亂し身体を傷ふ此の如く甚しきものあらじと而て自らはケークを馬食して顔容菜色あるを知らず、誹る者非にして誹らるゝ者も亦非なり、社會の事多くは此の類のみ能く中庸を守りて自ら克つ者時に之なきにあらざるも偶々一方を非難すれば其の公平の判斷なるを辨せずて直に他方に與する者なりと誣め、嗚呼誰か自ら好んで自己に關係なき事に於て世人の攻撃を受けんと欲する者あらむや、爰に於て正義の士次第に其の影を隠し其の翼を収め百鬼夜行各其の好む所を逞うして憚る所なし、而て身衝外に在りて選擇の自由と禁止の權力とを有する者も敢て自己の意見を發表するの勇氣なく之を禁止するの權力を行使せず只徒に其の勢の盛なる者に雷同し附加し諂諛し以て偷安を苟もす其の辭に曰く若し之を禁ぜん乎風儀の頽廢収拾すべからずと是れ

豈に暴を以て暴に代へ亂を以て亂を制去淫に繼ぐに淫を以てするものにあらずや、勢此の如し彼等自ら高く標榜て高潔なりとなす高潔乎蠻風乎磊落乎不自然乎吾之を知らず、只之を以て風儀の頽廢を支へ得たりと自得し自ら風儀の頽廢中に在るを知らざるを憫むのみ、吁何ぞ其の本にかへらざる吁何ぞ自ら制せざる

○所感 一 (獨孤意生)

○蔭に退いては彼れや是やと罵り騒ぐものが人の前に出てゝは唯々諸々たゞ他の意に逆ふなからんとをこれ勉むるもの世その人に乏しからず否滔滔として殆どその人にあらざるなし而してその自ら辯するの語に曰くこれ平和の法なり交際の術なり而して謙讓の徳なりと而も我は敢て云はんと欲すこれ卑怯なり不信なり破壊の基なりと辯論討議は決して好争にあらざるなり然れども荆棘を裏める錦の褥はその人を害するや深き内に不平あり心其の非を知り退てはその不當を難し蔭にはその曲を誹り而て唯陽にのみ悦服の狀をなす夫れ何を以てかその事に忠實なるを得んや何を以てか眞箇の一致を望むべけんや

將に何を以てか信あり義あるの交を結ぶを得んや縱令一時は平和の觀を呈することあらむも邪推猜疑破壞の病毒は竟に深く膏肓に入るを奈何せん縱令一時は苟合相親しむとあらんも其基礎たる內心既に相背くを奈何せん怯懦優柔自ら進んで事を起すの勇氣なく奮て責に當るの元氣なく是非の心は明なるも敢てこれを貫くの決心なく徒らに謙讓獨り自ら用ふるをなさずと云ふも疑名の下に唯目前の偷安を求めんと欲する世潮滔々としてこれに向ふや久し特に恨む世の尤も眞摯に熱誠に且尤も活潑なるべき青年學生に之て亦率ゐてその渦中に投て去りたるを彼等の學校に出づる彼等の教室に於ける彼等の組織せる會合に於ける彼等の笑談彼等の交友に於ける彼等は概ね斯の如きのみ陽には所謂『當らず障らず』を主とて退て蔭に愚痴をこぼさ不平を鳴らし惡罵をなすのみ學校の益活氣を失へる同校生間の益陰濕なる諸種の會合の益恭微する眞箇朋友の皆無なる固より其の所なり徒らに老大人じむは青年の事に非ざるなり徒らに陰氣に引籠主義なるは自重する所以に非ざるなり青年須

らく公明正大なるべし落々淡々たるべき而して胸襟相披き肝膽相照すに至らん爾の活火は赫とて四荒に輝くの素あるを知らずや

○學問の爲めに試験あるか試験の爲めに學問あるか今の學校なるものを見る吾頗る疑なき能はざるなり教師教室に於ゐて眞面目に諒けて曰く『此處は試験に出すからよく覺へ置くべし』とこれは(一個の手段に過ぎざる可らざれど)而て生徒は唯々として退き恟々として試験の爲にこれを勉む彼等の眼中唯試験あるのみ學問の爲めの試験か試験のための學問か吾竟に疑なきを得ざるなり我郷里に於ては慈母よく兒女を賺して云『饅頭を買ふてあげるから本をれ讀み』と小兒悦て讀書す而も其の心唯饅頭を貰はんと欲するにゐるのみ爲めに如何なる智識を得んなどとは元より彼等の解する所にあらざるなりされば饅頭を食ふ時は則ち讀書を止むるの時なる也吾とて敢て試験其物を乏かく有害なりと云ふにあらす蓋し學力計とて止むを得ざるものならんか唯これを行ふものとこれに應ずるものとの心術方法如何に由りて其だ學生を誤るとあるを恨とす

るものなり人若し苟も單に卒業證書を得んが爲めに學校に出て試験の爲めに學問するものにあらずる以上は現時の趨勢大に猛省する所なかるべからず何となれば試験は必ずしも常に正確にその學力を驗すものにあらざればなり其の成績は必ずしも常に正直にその學力を表はすものにあらざればなり例へば眞に理解するとなくとも唯暗記さへすれば長成績を得るとあればなり試験の前夜俄につめこめば試験の後には直ちに忘るゝも成績には差支なければなり自動的に進て考ふるよりも受働的に先生の説明又は筆記其儘を繰返すとが勞少くえて試験の爲めには却て都合よければなり元より眞正の智識あるものは長成績を得ると疑なきとならむも而も亦一方には斯の如き試験専門的の學問あるとを忘るべからず而して世には斯くの如くにして得たる成績を以て揚々たるもの多きを見る或はそれ其の學ぶや單に試験の爲めにするすのにあらざるなきか若し果して試験の爲め學問すと云はゞ吾亦何をか云はん苟も然らざる以上は漫に試験に狂奔すべからず徒らにその成績に眩目せらるべからず現

今の試験は多くは暗記の試験なり現今の成績は多くは一夜漬の成績なり而して現今の學問はアクサブよりも寧ろパツシブなりこれパツシブは勞少くして以て試験に應ずるに足ればなり而して今の教師は試験を利用せんと欲て却て大に生徒の試験専門主義(即試験の爲めに學問するもの)を助長せしめつゝあるものには非るか。世間は切りに呼号す今の青年は活氣なし今の世は翻々たる小才子屑々たる機械的小智のみと嗚呼汝世間よ餅は餅屋に行きて求めよ此處は試験なり

○嗚呼我文庫を如何せん

雜報子一夜机右の龍南會雜誌をとりて、これをひらき見しに、第三十三號雜報欄内に、『雜誌部文庫』と題せる一節あり、曰く

今回我雜誌部に一の文庫を創設することを企圖せ、(中略)備ふる所のものは、諸種の雜誌、及び書籍にして、多くは教員諸氏の寄贈を辱うせり。事業創始に属せ、未だ整理の緒に就かずと雖も、今後多少の時日を経過せば、幾分か會員諸君の便利なる機關となるを得んか。』

云々と。嗚呼吾等は實にこれを読み、忸怍たらずんばあらざるなり。今や創設の時を去ること、殆んど五星霜、而して幾多の雜誌書籍は、日に月に購入せられ、寄附せられつゝあるも、顧みて、我文庫に藏する所の、書籍雜誌を見るに、寂々寥々實に憐れなるはと。嗚呼吾等は文庫の創設者に對し、前委員に對し、寄贈者に對して、はた何の面目がある。嗚呼、故人の紀念とて、贈られたる書籍も、今は其影をとめず、只見る數箇の箱に、故何々君の紀念の爲に贈る者なり、とて書籍の日録のみ存し、中にはあらぬ書などの入れあるこそ、實にうたてき事にはありけれ。既にすぎたることは、いかにいへばとて證なし。現在及未來に於て、かゝる不都合なくんば、又何をかいはん。然るに現在に於ても、新聞雜誌の紛失、數多く、吾人をえて、偶々何々雜誌を借用したしと、申出でらるゝ諸君に對て、答ふるに語なからしむる、沒德漢あらんとは、豈に悲まむべきことならずや。

請ふ試に思へ、我文庫は、いかなる目的を以て、設けられたるかを。會員全体の便利なる機關た

れ、どの希望を負ひて、設けられたる文庫にはあらざるか。一の事は前部員も既にいへり、既にいひて益なきものを、吾等薄徳の輩が喋々するも、磊落豪放なる快男兒は、蚊の鳴聲とや思ふらん。いひて益なきを知りて、猶愚にもいふは、『おぼまきこといはぬは腹ふくるわざなり』との兼好の法則に、われらも洩るゝこと能はざればなり。嗚呼、いふも益なきか。嗚呼我文庫を如何せん、嗚呼わが文庫をいかにせん。

○他山の石

頃者樺山文相、第一高等學校を巡視せらる、時に文相が同校職員に向ひて質問せられし事ども載せて同校校友會誌にあり其一節に曰く

文相最後に問ひて曰く當校學生は能く規則を遵守するや否やと予(舍監谷山氏)少々顧慮する處あり(中略)數日の後柏田次官我が校長を呼び文相の旨を傳へて曰く舍監、學生の活潑有爲を稱すと雖概えて其不規律なるを見る爾來宜々戒む可きなりと予之を聞きて未だ釋然たらざる所あり一日次官を文部省に訪ひ叩くに其細を以てす次官答へて曰く蓋し机に

憑るの態禮を行ふの姿より一般の言語動作及び寮内の不清潔等を指さるゝならん文相近次某校の卒業證書授與式に臨まれ還りて曰く進退節あり昇降揖讓せり高等學校の粗野たるに似すと以て其意を知るべき也と予曰く我校生は質朴にして未だ彼監督官の車響を聞き直に室を清め物を整へ以て裝飾を施すか如きの術に熟せず故に思はず禮を貴顯に失ひて者あらん是洵に吾等教職の罪なり然れども直に其外形を以て其眞想を判斷せらるゝ如きは聊か憐焉たらざる所なくひはあらずと次官曰く然り此れ大に熟考すべき所なり但後進を誘導する單に磊落なれ活潑なれと曰はゝ必ず其弊を生せん故に文相の意を推すに磊落にまて禮に合ひ活潑にして節に當らんことを獎勵せよと云ふにあらんのみ云々と

讀み去りて余亦顧慮する處ありかり不規律を磊落と誤り躁狂を活潑と稱ふ暴言を壯語となし矯激を氣概と喜ぶの徒宜しく猛省する處あるべき也、さはれ參觀者ある毎に明日は何々に就き室内の何々をの通知簿が各室に飛ぶが如きに到り

ては我習學寮がかく迄も不規律に陥れるかを怪むと共に外客に對してかく迄も飾らざる可からざるかを怪とせざるを得ずア、士たれば須く主張あるの士たれ、自重の精神あるの士たれ、自信を貫くの慨あるの士たれ、況んや學校をや習學寮をや。

正誤

前號雜錄欄内稼堂先生の玉稿「庭のをしへ」の下『抄録』の二字を脱ぎ又

四十五頁第一行「誓て國家の變に働」の下に『て見せ候はんと、口を揃へて申ければ、さみは、拙者は、いかやうにも取計申すべしとて、武五郎その足にて、御前に参り、かの兩人は誠に立派なる勇士なり、今これを殺すは返々もをまぐみへば、しばらく死をのべて他日の用に、』の數行を脱せりこゝに訂正して疎漏の罪を謝す

明治三十二年
五月 中 生徒圖書閱覽表

(日數廿六日間)

圖書部類	冊		數		閱		人	
	和漢書洋	書合	計	百分比	和漢書洋	書合	計	百分比
哲學	三四	三	三三	一三二	六七	三	六〇	六〇
社會學	三三	二	三五	一〇二	六七	三	六〇	七五
文字學	一〇	二	一二	一三二	四	三	一〇九	二七
文學	三七	三	三九	一三二	七〇	一	二六	一八
史學	一三	六	一九	七三	六	一	一六	八〇
地理	二四	一	二五	一五	一	一	二	二四
數學	三	一	四	六〇	三	一	四	一〇〇
物理學	六〇	五	六五	四五	四	一	五	六九
醫學	三〇	一	三一	一一	五	一	六	二〇
兵學	一八	一	一九	一七	二	一	三	〇三
技藝	二	三	五	一一	五	一	六	二〇
產業	一六	一	一七	〇六	一	一	二	〇四
隨筆	一〇〇	一	一〇一	〇九	六	一	七	〇六
叢書	一五	一	一六	〇五	一	一	二	〇三
雜書	二二	七	二九	一二〇	一六	四	二〇	一四六
合計	一五九	九	一六八	一〇〇	五九	八	六七	一〇〇
一日平均	六二	三	六五	一〇〇	二二	三	二五	一〇〇
前年同(増)	五四	二	五六	一〇〇	一七	一	一八	一〇〇
月比較(減)	一	一	二	一	一	一	二	一
備考	本表ノ人員ハ延數ナリ更ニ一日内ニ於テ同一ノ人幾回來ルモ一人トシ本月中ノ合計ヲナセハ八百七十二人ニシテ其一日平均ハ三十三人強トス							

明治三十二年
五月
中圖書增加表

圖書部類										和漢書		洋書		合計	
社會學	字書	文學	史傳	理學	技術	叢書	雜書	合計		部數	冊數	部數	冊數	部數	冊數
一	一	一	一	一	一	一	一	四							
四〇〇	一	一〇	一	一	三	二六	二	五七							
一	三	五	一	一	一	一	一	二							
一	三	九	一	二	一	一	三	五							
一	三	六	一	一	二	一	一	一五							
四〇〇	三	一九	一	二	四	一六	三	六九							